View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

俳諧における題材と表現の研究 ： 「季」の意識と「本意」の展開をめぐって [論文要旨及び審査の要旨]

著者	中村 真理
発行年	2019-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第711号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017026

[6]

氏　　名	中村（なかむら）　真理（まり）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学　位　記　番　号	文博第 259 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	俳諧における題材と表現の研究 ―「季」の意識と「本意」の展開をめぐって―
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　山本　卓 副 査　教　授　田中　登 副 査　教　授　長谷部　剛

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、従来の俳諧研究の定石であった、特定の作者や時代を大詔とするのではなく、俳諧に詠まれた題材について、作者や時代を限らず縦横に用例を求めて古典との関わりを探る、表現の「系譜」という視点から、俳諧の知られざる姿を明らかにしようとするものである。

第一部では近世記の俳諧作者たちの、古典との向き合い方を探る。俳諧に親しんだ人々の多くは、芭蕉のようには俳諧一筋に求道するのではなく、武士や町人など別の生業を持つ庶民であった。彼らは余技として俳諧を嗜んだに過ぎず、学問の面でも、現代の評価俳諧と古典との関わりを考察する。

第二部では、このように中世期の日本で醸成された、歌学や五山文学から派生した「世俗の教養」に基づく古典解釈は、近世の俳諧の背景として重要であろう。では、その教養の中から、俳諧作者たちは何に着目し、自らの詩材となるべきものを拾い上げたのだろう

第三部は「季」という意識の問題である。詩や絵画、散文文芸との比較をすると、俳諧作者が古典に向けるまなざしの軸は「季」という意識にあったことが明らかになる。そしてそこに、題材に対する美的意識が定型化した「本意」が形成されることで、季語として定着し、表現が発展していく。季語は俳諧の根幹に関わるものでもあるので、俳諧と古典との関係から文芸としての特質を探るためには、この「季」と「本意」の意識が殊更重油な問題となるだろう。とはいえ、季語の数は膨大であり、性質も多様である。ここでは、横題（俳諧独自の季題）の中から中国文学の影響が認められる季語、なおかつ日本の詩歌における歴史が比較的浅い題材を取り上げ、古典や同時代の漢詩文との比較から、俳諧における表現の特性を探る。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

現在の俳文学会において、俳諧の表現を研究するものははなはだ多い。しかしこれまでの表現研究は、芭蕉・蕪村・一茶などの著名な俳諧作者、あるいは貞門・談林・蕉門などの特定の集団や時代を研究対象とし、その範囲における作風を探る形が、ごく一般的な手法であった。しかし、近世期に出版された俳書の多くは、現代のような個人句集ではなく、今となっては何一つ伝記がわからないような無名の作者の句をも、芭蕉などの句と同列に並べた「撰集」の形式を取る。近世期の人々はこの「撰集」によって、俳諧の表現を学んでいたのである。本研究は、従来の俳諧研究の定石であった、特定作者や時代を対象とする手法ではなく、俳諧に詠まれた題材について、研究しようとするものである。その基本的な研究姿勢に審査員の賛意が集まった。

第一部第一章の「歌を詠む動物」との題材は、『古今和歌集』仮名序をめぐる鎌倉期歌学から発生した俗説に基づく。これは、動物の擬人化表現の拠り所として、和歌ではなされない俳諧特有の表現に大きな影響を与えた。それは句の上のみならず、俳諧作者の詩歌に対する姿勢の記述にまでつながる、重要な価値観である。

第二章の「驢馬」は、近世期の日本には存在しない動物であった。しかし、杜甫など中国の隠逸詩人の騎馬像、および中世の五山で生まれた「驢馬」を「足の遅い馬」とする解釈が近世期にも受け継がれ、清貧の詩人の旅姿という価値観が俳諧師に投影されたことで、新たな「騎馬像」の表現が創出された。これら二章は縦横に用例を求めた秀作であるとの評価を得た。

第二部第一章は「本意」と「季語」の視点から俳諧の猫を取り上げている。「猫」という題材には、俳諧において「牡丹・猫・蝶」の取り合わせと、春の季語「猫の恋」という、二つの類型が存在する。前者は、中国の吉祥画「猫蝶図」と禅語「牡丹花下睡猫児」が中世期の日本で結びつき画題となったもので、俳諧では時代が下るにつれて詠まれなくなっていく。一方春の季語「猫の恋」は、和歌の「人の恋」を模倣することによって表現が発展し、「人情にかけて思ふ」という「本意」が形成され、横題（俳諧独自の季題）の代表格となる。この差異には、「季」の定着と「本意」の創造の有無が関連していると論者はいう。

第二章は季語「梅」と李節推の故事の問題である。李節推という人物を蘇東坡の男色相手とする、中世日本の蘇東坡詩研究の中から生まれた俗説がある。近世期、小説等の散文分野では『東坡先生詩』巻一の詩中の表現に基づき男色の故事として用いられているが、俳諧では「梅」が取り立てられ、次第に故事から離れ「梅見」の表現へと発展していく種々相を明らかにした。

第三部第一章は俳諧の「海棠」の問題である。「海棠」は室町期に渡来した植物で、俳諧では「海棠の睡り未だ足らず」とう楊貴妃の故事の受容が用例の大半を占める。一方、五山・近世の漢詩文では、宋詩において故事から派生した花の赤色を女性の化粧に喩える常套表現がそのまま継承されている。中興期の俳諧には、楊貴妃に由来するという「本意」に従いつつも、化粧の比喩表現に工夫を施すことで、伝統を踏まえつつも現実の花の忠実

な描写を試みた様子が見られる。

第二章は漢語の季語「葡萄」を巡ってである。葡萄は日本では中世末期に栽培が始まった新しい植物である。一方の中国では西域を象徴する植物であり、その常套表現は現物が渡来する以前から日本の漢詩文には取り入れられていたが、漢文学の表現に倣う漢語の季語の常に反して、俳諧には受容されていない。その一方で、棚で作るという特徴的な姿から次第に「本意」が形成され、その色と形状の類似から藤に見立てるという表現が展開している。これは「海棠」と同じく、現実に即さない古典はそのままは受容せず、実景に基づく表現を試みる、俳諧という文芸の自在さを論者は明らかにした。

第三章の「菜の花」は近世期から栽培が広まり、それに伴って漢詩・俳諧の題材となった季語である。当初は漢詩文ではなく、むしろ「山吹」「若菜」という和歌題との「雅俗」の対比から俳諧題としての意義を見いだされていた。一方で、実景描写の試みからは菜の花畑の広大さを詠むという「本意」がつちかわれた。それが漢詩の常套とも一致することから、近世中期になってから漢詩文の表現を受容する例が見え始め、俳諧題としての意義も「和漢」の対比へと変化する。

以上のように、実際の作例と「世俗の教養」の間に、季語の表現に対する俳諧作者のまなざしと、それに伴う「本意」の形成と発展とを追求した本論文は俳諧作者の意識や文芸の本質の解明へと迫った。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。